瀛海異聞 序

No. 01
Prologue

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

1909407
DK
18
.087
1807
RARE
Prologue
ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

寛政五年癸丑冬我仙臺之船子等江戸ヲ運送ノ
鑓ヲ載セ其十一月廿七日其船ヲ牡鹿郡石巻港ニ開帆シテ
奥州岩城之海上逆風ニ逢洋中ヲ漂事數日翌申寅ノ夏
六月初旬極北ノ僻嶋オンテーツケト云処ニ漂着(ヲロシヤ亜細亜ノ内ニ属スル嶋ノ名)
洲小係ル金毛(ヲロシヤ亜細亜ノ内ニ属スル嶋ノ名)
法官ノ下ニ 此地近時魯亜國ヨリ併セ有ルニ至ル所ト
ナル故ニ在留ノ本國人漂客等ヲ憐ンテ撫育ヲ
加ヘ依テ是我漂流ノ事ヲ尋ル事十箇日能ク解ス乙
卯四月初旬本國船回捧ノ便ヲ以テ漂人等ヲ
同地ヨリ連ニ送ル其六月下旬オホーツカト云湊ニ
着岸次第(これより北の方向きにある北亜墨利加)
北亜細亜(ヲロシヤ亜細亜)ノ内ニ係ル
此ノ如キ次第ヲ以テ代官

の歓待(モテナシ)あいこと秋八月かの之西辰夏秋のつるよりる迎
ふ宴を設け次日より十五人おくりてこと三ケ夜ふ出立川
前程ヤコー万等の請把を得て数百里隔り西
ふ向イルコー万 支把ふ亜細亜州ふと云所ふ当ふ日れやく
係る正白里の地と
こゝふお来り甚地懸更の接待ありて滞留する
凡八ヶ年西辰の夏ふ至り享和二年こふのまふ
至りしふこと三月ふ国の帝都ヤトルフルカ(ペトルブルグノ)と云ふ所より
漂客ふ上船の王命下りふを待ちて数百里の水ふ従
ムスクワ莫斯哥ふ旧都 支把蒲玉北極出地五十五度二十五分
東西経度五十度二十八分
小ヘテル甚旧ふ新都ヤトル
東西経度四十度
五十二分
フルカ小極出地五十六分
国老の家を客館とし——数日

清酒ヲ以テ之ヲ款待スルコト日ク酒宴ヲ為シ
徘徊――衣服皮褥ヲ賜與（ヲクル）――スルニ於テ
ハ之ヲ奉ジ――国王一日謁見ヲ許ス――
部下ノ一見ヲ乞ヒ之ヲ拒ムヲ知ラズ――
彼国ニ永日留ミ使節ヲ遣シテ其ノ
ノ為ニ艤帆（ヤカタブネ）ヲ使ハシムルヲ深ク喜ブ
茶平九年ヲ十帝ノ旧人ヲ護送ヲ命ジ
ヲ以テノ要港カナスタ（デ）ヲ経テ艤帆――
第那（デヲ）瑪尓加（ルカ）国ノ船ヲ以テ諸国ヲ渉
ル多ヲ語テ利亜（リア）国ノ一港ニ泊ス
洋航西ヨリ（アフロリカ）亜細亜（アジア）洲ヲ一周シ帰ル――

里亜嶌 土地亜弗利加洲ノ西ニ在リ天竺ノ初ヲ為ス 着岸次五

日ニ松ヲ出ヅルヨリ来ル迄六十余日ニ経過ス 亜墨利加列伯西兒ノ着岸ハ凡数月ヲ

文化元年甲子ノ春其大洲ヲ過ギ針路ヲ西ニ取ルコト十日亜墨利加西海中ノ

嶌ノ数ヲ暫ク見ル日アリ又面ノ近リテ

ふとゞ赤乃まつ下の海上をゝるゝ又

サンベイツケを歴てゝ発ゝるゝ亜細亜

洲東北の奥境ノカムシヤーツカトウ所ヲ

着岸ヨリ経ル凡四十余日ニシテ

北ヲ以テ帰ル

其季秋年外窪田おの諸臣ら〳〵望み啓
西肥ふ向ふ〳〵ら待續(ナガツヾキ)より請ひて来る月日
みそ十二月のまそ名月日あら〳〵ば一日之郎(カハラヤドキ)
宮下ゝ百ものゝ事一歷を問ふ〳〵ものゝ
徴臣 大槻 義質 志村 弘強
公命を奉〳〵事其変ふ興ふて尋問〳〵て其
大畧於蘭を好ふ未後ふ列位名諸大夫ふ
〳〵
内命二臣ふ下ふ其治未ふ詳細を質回
ふ〳〵ることてふ於〳〵事月来ふ〳〵を起
〳〵

愛岩下別邸の一舎ふたゝび日く質問記
聞をもちて質其深伯徹歴史沿革遂つ
て問を紀し弘強傍ら筆記次如是まる
事凡四年後日是より年を越ゆる去二月中旬
ふかく病を賜りて本官下ふ免まる此
暇記をふまへて修正補充し彼此徒歩備忘
札記ふたゝび此際ら経歴せしむる所以
草案ふたゝびなし

一

此記聞愚陋無識ふたゝび彼魯西亜
本地み入ふ且内帆ちる廣袤のあきを徒ら
動ふ妄ふ妄ふ多ふ和ふ其詳容ら

脱漏あるものこゝに一二を挙ぐ
さるゝ所なり其質其次を以て問を竪要なる
変ず記せざるもの多し後代尚ふるゝ及ぶ
実を疑を闕て疑を撥ざるの意か
ら次故に唯其臆記一事詳語する
も雑録せるなり
公命を疎漫するが如きを雖も為
知なり但其説く所解を異にして
為を為かゝるの多きが如き殆ど
の違ふ所を故に一を門人某画ると言ある
者を使いるの多きが如き

をあらしめ旦問ひかけ訂してまとめ數十圖
物集せる是なれば毎條下に添ひ稍と
其大要をしるせるなれど固より唯其器物ある
ぶ名をしるしてありて倫中尚こゝに出せる
所の諸圖を設け摸しこゝに補のそのの
ありを詳をまとめ形ちすべきハ縮く其を此
讀人をしてそこを大約を理云せしめん
ことを欲しこゝある但其衣服圖等のおも
常ものの真物を寫すにやあらん

未質他日草庵にかへりて編集のあら

一

迄さんと弘強う筆記をふるものと義質う記閲
せるものと對校ふるみの前後錯乱次序を落
をなし殆んどそのまゝ遺録をうめし為めに
甚質問し日次第を立る事能て尚を記
し隨手記次ふるも我ながら要ふるを得ず
話ふるみ綱を紀年編を為し事
年多かり一切迄言をもめて上下
脱誤みのをみ多せし為ふるを
勢て後とをお高を落をし為
笑ふ遠ふるを得ひ筆寝ふるみこと
及い紀す八日 番をふし俺留中なる

セーとゝろまでハ縦み門をとる。まゝゝゝ。
断こゝみ——多日を重ゝ月ゝ累ゝ日ゝ夕
ゝ按——按ハゝみ正——強ゝ偏次をゝ事
——たゝめゝ——志ゝ経ゝゝゝゝゝゝゝゝ
行文重復のゝとゝおゝれゝゝゝ次幸ゝみゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 天明申寅の歳 伊勢國白子ゝ舟 海ゝ大風
屋ゝ先ゝ主ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
カミシヤーツカとゝ上ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

学の今年松前より飯尾 是我国の人改過巴例ふ
いろう乃名もろ始あり
其名を以て漂流北地の事を記せる書也て
流布せるものもろもろ猶其地異聞を得て蔵
せるものもろもろ猶其地異聞を知るを旦
近日又一友人の宅にて偶然見るを得
遊覧せる一両會新聞と相合せて
而のその有故ふ旧聞新聞と相合せて
本編を校するに多くは本編中先ず旧
又大先説と係注せるの甚し
又義質の素業和蘭外醫箭翻譯ふ泛
事にあるまりて其書ふ海猟記

際傍ら彼著撰中坤輿の図説を参考ふ
るまでの――地理を主とすることあるま
門人某ある者に国地理を著すの
小志篤く好尚の著書頗多――前賀毎
按態言――甚一班を与り此事を
以て深意ありのまゝこと再回
る為也 人今まで数変おもふ次故
我しい彼が得ることもあり
寸尓是ある者もあり――もあり
甚説とするもあり活説の例ふ
伴書――読む人のはかりあるべきもの

ふるまひて彼の説話のごときを以て
しばしば解を要するものあり敢
て蛇足を添ふるなし

一 周に曰ふ地球男を自ら旧大陸ふるものあり
そのあり遠西の人旧ふかぶりてひなを
窮せしそを以て明の末ふこあり西洋人
内地に入りて其国説をかしくそ
初めてそを其旧大陸と
二曰アレア明人亜細亜又亜爾亜と音譯を
以て大陸小係るものハ西ハ亜瑠皮亜
百爾西亜(ヨーロッパ)ハ方みてハルヒヤ
應帝亜(アフリカ)ハ方みて天竺と
いふなり

東ハ支那（キイナ）（其ハカラモロコシ唐山ノ）韃靼（タッタン）（唐山の北の大国ありその清朝の奥り）韃地の部ハ唐ホ唐（其小ハ止白里ありと称するあって魯西亜の別地とするあり）魯西亜（ロシア）韃靼（タッタン）とするあり

朝鮮　我日本　琉球　蝦夷　等あり此諸列其内ニ收ム

女直

厦門（アモイ）を呂宋　阿瑪港　咬噌巴　宿霧島　をあり

二ニ曰アフリカ明人亜弗利加（アフリカ）又利未亜（トルコ）と音譯ス

此大洲ハ係るものを阨入多（エジプト）巴尓巴里亜（バルバリア）亜昆心域（アビシニア）ユ郭（コンゴ）嘉望峯（カボ）等の諸国之

厦門ハ福寧（カリフォルニア）麻太（マタゴルダ）昌斯加尓等之（ハワイ）

三ニハ ユウロッパ明人 政邏巴ト音譯セ

此大例ニ係ルモノハ 入尓瑪況亜

法蘭得亜(ハランテア) 又和蘭(ヲランダ)ト云フ 即チ阿蘭陀之 拂郎察(フランツ)

意太里亜(イタリア) 伊斯把尓亜(イスパニア) 波尓牡尓(ポルトカル)

魯西亜(ロシア) 一名俄羅斯(ロシア) 普魯士(プロイセン)

墺地利亜(オーストリア) 諳厄利亜(イギリス)共是ハ 等の諸國之

政邏巴の大省之

明人亜墨利加ト音譯セル例南北二大例ニ分ル

四ニハ アメリカ 南北西例ヲ等フルモノハ五大例之

七大例ニ係リ南例ニ立ルモノハ 伯西兒

智加等の數國有北例小係るものを
墨是可　新拂郎察（ニンフラーンツ）加里伏里泥亜
等の諸國之南小例を屬するも一ヶ例ハ南小とも小
三百年ツゝもうり改正已例より開ける
ちがいます
ヶ尼大例の図説明の未漢字小譯もり要地全
図あるものあるも又磯方外記あるもの説
譯の書中みも載せるも又和漢私
古邦小齋一ありる天地球并大地総界の
図の類諸家小著述ある為多一　宜庫小ハ大小
天地球并地球
図説也多一又近年世み流布もる新製地

球及世界国土皆以印大洲をもてるもの
なり是以なの漂流人い初より彼三大洲ニ
ウロの陸をさき内地を全ク五大洲をを経
歴もて実み大地世界数万里外印面乃
環海を一周して帰朝もるを実もて」い頼ゟ
以世界を着ゟ印大洲ふふてるを知る
期徳を渡むの先務ともるを而ゐれて茲
ふ附記て

一

以漂流以犯ゐふ国の人魯西亜国ゟ
人を国ゟりもるふゟ護送を得て帰郷も
一ゐれい頼ゟ先彼国の実お知ゟて

是をもてみれハ泰西と称（トナ）へ暁を称（トナ）へ
西亜國をおと上ふ（アウロッパ）ふ亞細亞（アジア）州ふ屬（ゾク）する
の説あり故ふ彼ふの説を以ていへる
地をもつての方角といふまでなく
ハうにおもふるあり〳〵そハ百五十
年も以前よりふムスコビヤのことムスコビ
アハ、白石翁五度異ふ名をまるる
をもつて方位千貳百余里程しかる
未亜と音譯を誤て記せし白石先生の見矢言ふ異言ふ詳
也本草質ふ是〳〵てハ花とあり〳〵場説をも計ふ未ハ異言ふ詳
説あり参考して
其詳ふるを俟（マツ）つ
以上國皮章ふ名あり章私
以上者を参
郊ふ齋（モノ）〳〵其ものを

以て貢人等の名となす故に其種類
中着胴乱など
みんでん小人ぐるーぷあまるとなる一
ゝ申ふもものこととおもふあり即ムスコヒヤ
も其品も一名なるーー地名多くるゝハあり
ゝるけムスコヒヤもと都府の名ーーと全
例の総名となるを知るのお名ハリユニアスオロス
イスユイなどよーー明人魯西亜と言訳也
ふ政還已例の西北方あるーー王国あり
而して其王ふ貢王某あるを人皇
ゝ諸邦を懐ケ後世ーーも其
東北方亜細亜例止白里支那韃靼の
ふあり

の諸國をとをり盡境カニシヤ
ツカヽ出る迄りて迫所を東北蝦夷諸島
ゐも其人口健次京保元文の頃よりも
多く地の人俘囚を指して蝦夷
赤人と呼ても是ハ彼人赤中千餘程
て餘の蠻の着物ハ着ものおかゝえて孔
りふりひ袖ハ一ツもなし　これを見て
こゝろ〳〵そ男人ともてゝをあるゐとゐひ〳〵ゐこそハ彼夷ハ赤
人なのゐあるこゐのゐなとゐゐ〳〵こゝを奥の地そゐを赤人赤服夷ハ
指のゐとなてハ彼地獄の後ゐそ〳〵赤鬼ゐそゐよれの志ゐゐゐ
ゐとゐれ性〳〵とゐそゐたり
ロ人骨西亜人ゐふゐ傳へ知り是をオロシヤ
も轉訛〳〵唱へ又ハオロシヤ〳〵と俗

出ずるの後――れなくいうて其解当より
帰朝のるも有名なる事の中に一事
あり――てこを領府とするまで地みあり彼亜
細亜本洲の内地く渡ら清国(支那)まで陸
路遥已るる王都まで甚だ内地直径なる事
――事此使宣するまで使節なり――つき
時節みるまでいめ四大洲を環海――並
おしてあまねく各国をセーなる世の地理志
るてこの域まるまでを知りるんと思うも徒み
図説をつくて国勢かおるまでとあり無る体
示郷の人ものくに親まで其無洲を親

視目瞻〳〵未ゝ𠮟を加へ詳みに
幸ひなることゝ思ひ是非城廓を見詳に問
ひ糺〳〵質〳〵の形勢〳〵並びに其
要のよろしきを察して其質等亦国恩忘
公命を趣なく〳〵変を乗〳〵節重み
窮詰をる而已ならず
彼方の人々〳〵かく親しんこちくをふ
ふ為めなりや有まじきことなるをおもひそい
ぶを頑愚なる石儒といへども矢も盾もたまらず
海外四邊外ゝ許多の諸大洲
国土あるまじき列居をるまじきを

ちるを簡単に常の人を固よりも比べ
ものを首(かうべ)さるゝ深く乞ふ人異域を郷
郷とする勢ひ其国情俗尚をも弁へ
を講ずる事に於ては常み海外諸国の
方位土風地形志度狭阨膏地海乃里の
を辺家候のこと温和寒暑の軽重人種の多
寡厚薄政教志邪正各士民治乱興亡等
免知ること不虞おまさい萬全を謀とやいふ
而きつめ(ゝ)ておもてなるものあるもの
つまるゝ古みをあさる事もあり今ゝ
古を論をかゝ(ゝ)ぬ古をもて今の事

是我邦五穀豊饒五金富厚ある元
十をあるゝまゝ地を顧るに及ばゝるに因
あるゆへ——無のゝ常に心——て学ぶある
事をみるとゝもけゝ編に興——ゝるの似て大関
係せ——るゝあるゝとおもうてこゝに資ゝる
ゆへ此度清客等魯西亜都府印行ゝる萬の
世界図 方図ゝ及ゝゝる界 地球の表面ゝ表
御覧を経ゝ石ゝゝる義質 編集の参考と
ゝゝる事——て幾千ゝゝる国而是地図ゝる
地形ゝ格を器知ゝる事——とゝゝゝる
洲各土の地名を記ゝる。而ゝ——いゝゝて

彼邦天文殊その横行北文ありて一と読て
是が解説をうるに至らず文庫の蔵する
ところ社中好事の一書生営て彼大先の
出記せる彼國の字體配剤器傳等を悉
皆謄写し門下に属せる者なれば此
生をして彼地名木を讀しめ其図四幅の模
写家中一家國字をうつしとらしめ譯記を
免脚是が系図みをつくる上る（圓球の図も亦
同しく詳記せまる）百つて一後世を先須史易を見ら
四大洲みるてる所を雑識し又此の際
甚四大洲を倫悉せしめ乃程をを明

同盟――回答を花房公使に送り海外
諸国の事情を通知せしめのみ
其一部始末――

一 本邦と海外の海路右の世界の図中――
別に来往を引き日歴を記しこれ彼我
甲乙案計彼此某なる者の長崎出帆
海路かの如き記――て贈るべきこと
右の模図中小生係せ――てまず此下
西京の状坂田屋北条図全備を我
公に備えんとせり渉筆――
万重冨永句――其海路

日暦ヲ精思熟考ノ上遂ニ譯定カカル
別ニ総界全図ヲ製シ其格図ニ右ノ海
路日暦ヲ譯記解ヲ其考定ノ趣意
ヲ備フルコトヲ経過ノ道程ヲ記シテ
又タ校正再刷ノ為ノ遅延
ヲトヽノフル他日発原図ヲ改
新製考定海路全図ヲ得セ我
公ニ呈シテ
公一覧ノ後御命ニヨリ
模写セシモノ復頃ル再校ヲ加ヘ
以テ
公ニ呈シ初メ許ヲ得テ
四版ヲ施スヲ呈ス五版ヲ

時考定新製圖を、我輩おんと欲して
て揚を見〳〵さるゝあり、實み本編讀の
際は〳〵の如く其方里程迴北方角の
如きもの、並步あるくるもの
差質幸當と交誼年あり近日新製
圖系揚をりて差質み次差質幸み
ゝをりて已亦甲子のイキリス出帆後の
海之記聞と按合〳〵因て亦發板さる
而步ゝあり〳〵次〳〵てまくゝを明治
さる殊み其ゝみを為也〳〵陸よ名漢
ス利亜ハ「ハムト」と云大陸あるを加那里亜ハ「ヲ子

川已西土の物多く産し近年東国
より来れり一説地名なりともいふ
み和絶えて多く訳名の俚言の一通ふ
とて下り但そこに数生の諸禽中漂禽
ホ鴛記一年多く名かみそもの
り漂禽セーアミナヤ方の名なり此禽
数生の諸禽の中多く必ず一日を経
漂ふ故一を同じ礼をなこと多き
活等の中多く稀ひ(カガ)一を名のおそを
旧名称ふ一なり一を云
年論多方の一と名ふ一とそ

宣て出版人名の摩せる図面を謄写し
公命を奉じ
次に示す皆田庚全面をいて膳夫岡氏は
余を召せるを熟視し盖しおもらく
清人の譯官かと尋ねまた
彼国語を作って通ずるかを試みるを
以てなり一の彼なる一地名を記する普
亜文字を讀しめて新たなる改譯をな
その第一亜墨利加の伯西兒ハサンロ
カニアリニ」まで「ニルクエイス」サンドリ
イク」等と即基督教を奉じて後

條下ニ附記セリ海防記曰ニ即是ノ
一 鎮肥田豊別莊ハ多ク脊西垂本領
全國一幅ナル豊ノ本國ヲ枝葉トシテ
甲斐ノ枝本ト称呈上スルヲ云豊別
是ヲ和蘭語ニ模ノ命ハ譯セハ其模
國地名等國ヲ以テ記スルヲ云ヒ
リト即脊ノ語系(デン)ヲ模写ソノ西國
ヲ脇ヲテ望田庚ノ足後ヲ供ス庚ニ
ヲ圓ハヲ後轉備ハ爭我ニ送ル
ヲ一後ヲ告ヲ請備ハテ為質ヲ
質向ノ神トヲハ必勝写ハテ記ヲ備ヘ

集光一秀ヲ傭ヒ之ヲ命シテ丙寅初
春ヨリ始メ筆受シテ昌ニ捡閲セラレ
本領新旧諸洲ノ形細ヲ悉シ且ツ
其ノ他名所旧蹟物産等ヲ附記シ
ケリ其ノ名ヲ旧版地図ニ取リ
以図ヲ定メ小ヲ論ゼス悉ク
之ヲ図ニ模写シ各枠外ニ
ておのく土ノ国ヨリ
国中郡府県邑ヲ記録
精細ニ之ヲ考定シテ譯洲一冊ヲ
図面里程長尺ヲ録シテ
巻ノ附言ヲ

依て彼論説の精粗初て判ずるを他日
まつことを我ものみあつらふ所賀の家中の後
おのおの経模字也しも前賀勢てそを熟覧
するみ字誤ハ多一和蘭呼ふ和語地
名をいて例りみ名まみ施すをそこそ
ふ
ここをも地み訳てを大名多あくとふ
為一と称る脅西亜の称ゐとわひな
異なるを異とと譯司脅西亜の文を
訳一するみ目てなる為一暦局改詳る
るの八右まりる如くあれ地名を固都邑
製名等悉記ずみ多るをて其附説譯

解すること容易からざるを
勝れりとするを以て乃氏の功績あり
とす（以下欠）
（以下欠）
（以下欠）

一人魯西亜新教ヘトルフルカの図を著すの
ありを洩れ幸大先将来せるものも備りてこ
瞻望しても其図中宵歸る心を所説
有ますく其詳を以前をそのこ他日をかりて所
望やんとをそ又陽客郭廣の説話と係をそ且
頗るこを掇(フンヒロ)をあまるるよりこを抱ある而
も編寛政癸亥のみを出版新風を吹廣めん
為く漂言(言)ふ初りをれり魯西亜国本
地ヶ入イルコウツカといふ所と數年滞留(在)する話説
話の中をに私名五六ーをおしてそれへの
ひーー変ぬけ迄い御みちる門おかて紀(記)
(その末)

以前をうけまとめ筆を起し一部の物語
箇條箇目文化元年甲子の秋より寄稿
まで事実の紀行小説まで一部の後十四巻
となり右の数中より八冊を新事に集めて
末篇とし一冊十五の巻とはなりぬ
以て十五年来の異聞紀事なり

一 弘化戊午の夏江戸城の内外なれば事
彼地より飛札至り即日の開見あり
彼人より国より彼等を賓客をとり待
あるべされば年中繁く毎く往復
をなすべし年の内より奴隷のごく役

也――ところで今日は先ずある事――これは非常に以上の事は疎漏あるごとく僅かく――ごく少ないかと如きと学識を経ず――て誤りなく其責任を事を事をこと――故お此紀事を遺して全く彼国の変遷を垂らんとするの次第にて御承知のごとく彼等の多くは誤りの事多かるべく或は質おう少誤りもあるべし――又質問の遺漏あるもおおかるべき彼らの一端をみるものとす――

一 予輩おりてるめくお論あり年――今後をまた雑録を終るも毎々不足説をふるめく

玉淹留の地を過ぎ必ず大温を見い雪中の
行旅面を露ひるを以小蓑(カサ)と名く皮裘(ヲ)を衣て
こゝを掘(ホリ)こゝを動(ウゴ)かすに堪ざるを以て枝(ツエ)を
もて沓の裏(ソコ)を突(ツキ)つゝ歩(アル)く又或は赤膚(ハダカ)裸體(ルイ)日夜河海を浴(アビ)して
一の暑(アツサ)を避(サケ)るといふ往来実(マコト)に夏(ナツ)なく冬(フユ)なく
国(クニ)ごとに諸国の人数八廿餘種容貌言語
も異(コト)なれども皆合(アツマ)て一小人(コビト)島人(シマビト)也(ナリ)人
(サルケイサ島ノ長大文身ノ人)の数八吾人和漢諸書裡官小説
頼(タノ)もを載(ノセ)其図説のごとく開見(ヒラケミ)せて
異人(イジン)の親視(シタシミ)愛接(マジハリ)又彼北道(エゾ)そだち

ぴーす馬きめくぶ雪車を牽うまるの奇観
又言ふのこなし——宮中を走〜て宮殿
一見——式を済ませ又宮を出る駕を
急がせ練を又吹管を生ずる牛乳汁
吹(ふ)——みをせなうう 椰子実(やしのみ)——ぶ実食
る味を賞ふ——のち夏こ物こ一下——て寄る
らさるるる——再をる——日を七日ふ
対話談話ふ地を小亜墨利加洲の属
国と略す亜細亜(アジア)洲欧羅巴(ヨーロッパ)洲亜弗利加(アフリカ)洲亜米利加(アメリカ)洲の五大洲方を通歴——て地球の四面
環海一周——寄満涛の万里を清き

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

亜いにおこる。陶朝セ――ハン前代まで
有の一大帝国みて上下古の制度こと
全絶て学ぶ。前の帝宿異国なり帝を
以海環海是を以て額――せるもそう故と

一 亜国北面み海を受――国なれ沿海の一封
客郡もまれ小城是高み深着する港多数
武八洋船の後送かりて帰朝――そ是る時
説を紀す世み多――然ども唯亜
細亜州方一州中の風地あり近き唐山
海面をきは北那南海を受諸国多
隔ると雖ども去ること万ハ数百里中

一 西篇西漸附記思想書誌說等復鄭
ふるさる西一再校セハ又遅後を西ふ固より
漂客一時口供ハ雑記あれハ意のまゝなる我
ことやうにかゝるよ高貴の學芸中一て不文ある
哉て一て是こそふゆるゝ但を倫俚口當の音
さ記憶のまゝ思つゝるふ所之

一 編中一ヲ西校ふ添セるふ多一漢古のヲを
ま卵と記一ケイロテとそひ西山陰地とそ一な名
リユニアをオロシイアスオロシイスコイス又魯西亜とそ
音譯字を用ひ又通称ふ従てオロシヤと記附紫
陰ふを和漢そて書一又ハ賀ふ話國の地名書

もと異い彼らをも用いるの類之其中に六文字
遠たるも枚多きも一前後お照一
音しお如一ごとんする仮名お
蛮語国名片仮名をもて其音を慎るの二
合るお用るものを一字をもてこと音昭和
ようをもあらわすごとく「江」イ「江」のまねごと二字
おもてれ用るを音如ふうあ一個勢佛のる
タふあるのとありしお引ものこーこーと記する
の類之をこうこうのらと混るふなどっを右側
ふ小書するとっカツ等を仮名るるの
又半濁音ハ字の右肩おっを記すがが

が一個音りを用ゐ甚外亜語を併せ
その大低一句の句畫を設ゐ甚上下の文を混同
せしめざるなり

一 海中羅甸語云ひく録をふるの名羅甸ハ
西洋言語の由て起る所ありて此古言今ハ
於て頗還已別中諸國通用するものく併此語
あって記せる書を学ぶあらざれハ解
という但名物の称謂等を総別通称年久
しきを故一言一語を知るあるまとも
アシワトルを羅甸語と混ずるなり

一 亜西亜國字総計三十三字 横行左書

ゐてをオロシイスコイアウフキといふは――我が多分
といふやうな――和蘭字を似寄――字體音声共に
異なる旦其数も多く――漂客四人の口まねをするに
ゐるものゆゑ――故み言語の数も百あまり
ふさうさうな事也――とおもふ
ベトルブルカ」をビセルホルカ」ベートルがう」をバウラウケ
カウ」と云へ――遠――数多り文字を発み文字
も習いなければ――彼言語も分らずして
――ちうさうといふ事也しは甚億記するものゆゑ
一下いふをちひろる混りあるべき事も御ざ
ませんゆゑ筆の門あをハ彼のる

をなひまぶみ之彼國ハ書ヲよくするハ
神權みあるゆゑ甲嘗て支那ゟ佛(ヲ)
一ぶん楷書(カイショ)ゟ草ゟ篆ヲ二體ヲ
ゑりそふゑるたよう一て博物の一旦ハ彼を
ヲロシヤ國ノみな諸書ヲ多ケレハ暑ヲ其中一異体
ナルモノヲ左ニ記ス

一 和蘭の書ニ曰ク爪西亜ノ文字其始ハ斯利句
泥亜ト尼勒叅亜トノ二國の二人ゟはじめり出タル者
也ト云り斯利句泥亜ハ古(爪西亜の始祖生
ヤー玉ヒ尼勒叅亜の教ハ昔ヨり今ニ至ル
ヒ爪西亜人尊崇スル所の若ゐり

松小 亙(ア)ガ 丘(デ) 正(ユ) 工(イ) 亞(カ) 亞(ユリ) 亞(ユル) 亞(ユヤ) 亞(ユテ) 亞(ユフ) 亞(ユ)
三字其體ミナ尤勒叅亜ニ同シ

又(ヤナ) 㐬(キシ) 㐬(ビシ) 㐬(トシ) ノ四字アリ其用ヲ詳ニセス
其楷書ニ似タル體示詳ナラス脊西亜列
刻ノ諸圖圖ノ内ニモ此等ノ字アルモノヨタ
見ス而メ右ノ四字ノ内 㐬(ビシ) ハ則チ尤勒叅
亜ノ 㐬(ビシ) トス云ヘルヘシ然ルトキハ此等の字モ
示脊西亜ニアリト雖モ國語用ユル
ヤナキニ圖ニ署スヘルヘシ和蘭ノ書ニ脊西亜所用ノ
ミヘタレハ此外猶尋常ニハ用ユル
ヘキ者尚數字アルヘシ

十編乙亜の歳拙老病を力めて丙寅二月の中
旬より二臣退いて弘強其月より編集の草を起し
各質随て再校増訂――其秋冬に至り弘強稿成の
仍果て未だ全く帰らず稿を以て各質に属し
又別に紀国より雑記数編を宣勢と素典
の間彼と此と比較――す後転任錯雑て
従事を得ず記参勘等日々積て又新ら
なる物品諸国を作――ち或ハ地図の校脳
を譯セ――もるの會議件後此度整
月を累ねるまで如斯編除の業急ならず
ることを――と雖もこれ又各質の

文化四年丁卯初夏　　醫臣　大槻　茂質　謹識

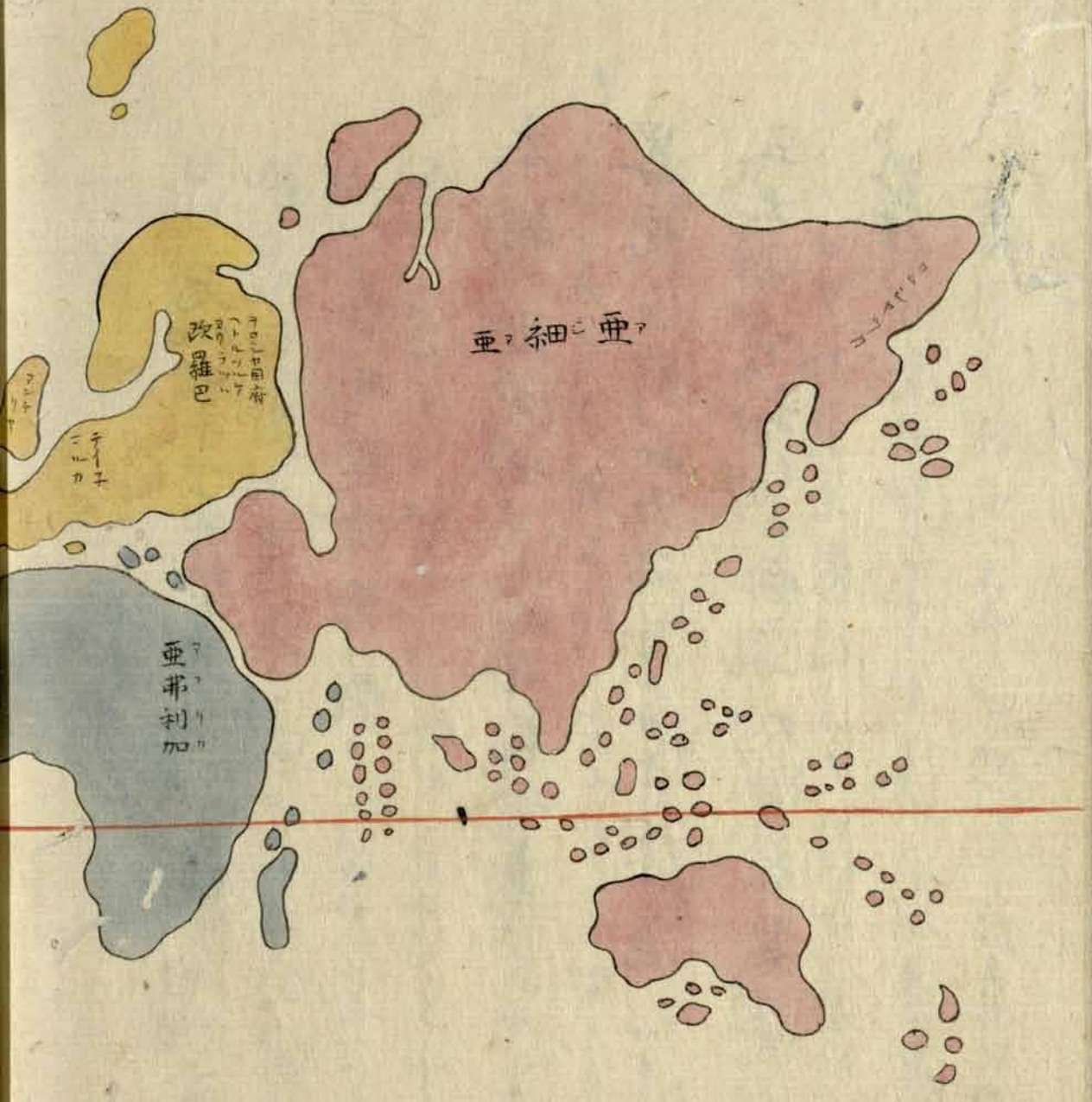
魯西亜使節船

本朝へ渡海ニ――就於長崎書き上ル　ところ

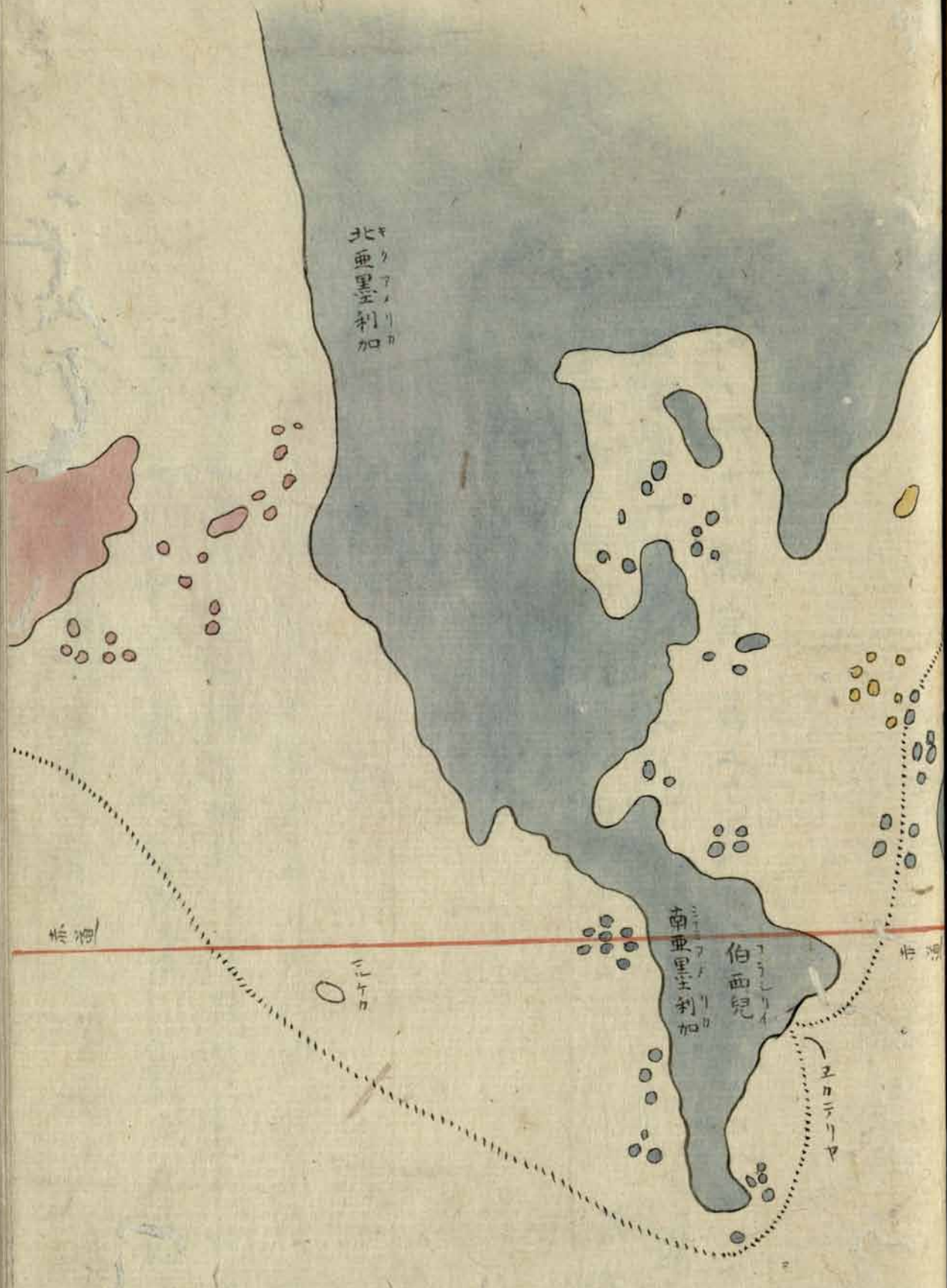
器図ニ写し乃ち海を渉るの為すり

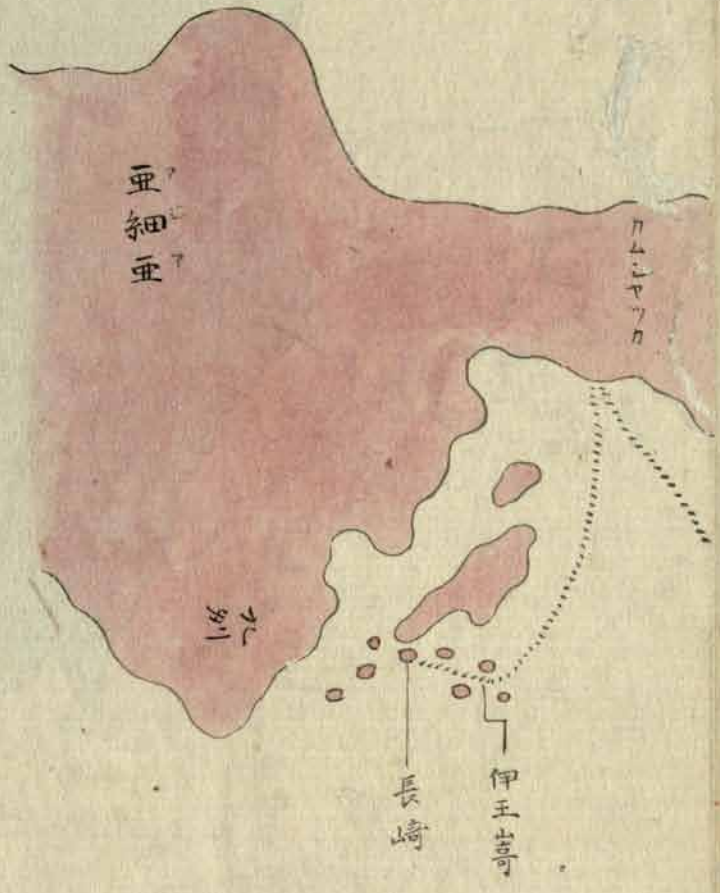
五大洲を歩らくるに大約志器備図と

なす



ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM


北亜墨利加
キタアメリカ
伯西兒
ブラシリイ
南亜墨利加
ミナミアメリカ
ヨカテリア
ミレケカ



按ニ地球ヲ平面圖セルユヘ亜細亜コムシカツ――
西方出ルナリ「カムシカツト」ハかミシヤ――ツカノ和業
呼ノ所ナリ譯官ノ書上ケユヘ如此書セルナルヘシ

目次

巻之一
寛政五年癸丑石巻出帆後難風ニ逢い数月
漂流ス甲寅六月オロシヤといふ国ニ漂着
ス一ヶ年ニして帰朝ス記

巻之二
ナーサカ滞留中の記并ニ魯西亜紀事ニ
して乙卯四月ニ陸を發ス其後の日地方
オホーツカといふ湊ニ着岸数日逗留を
八月より翌丙辰の年三十五人の者を連て江戸ニ

ーツカ出立ヤニー行こて了ふ到るまでの内中

記　拾五回

巻之三

マコーツカへ着暫ク滞留史ありイルコーツカを発
途命令人数追々西宮十二月同所へ会合セ
ーとめ道中記等ふ付命ふ教等を修ム
ヲふるる記

八ヶ年滞留中紀事　ふ類

街衢居室　　第一七回

巻之四

飲食　　第二

服飾　第三　世図
巻之五
寺観道教　第四
産育及赤子命名　第五　六図
婚　第六
巻之六
葬　第七
祭　第八
衙廳并官名職掌政治兵卒武備　第九
刑訟　第十

餘負 待缺
卷之七
尺度 米里程 第十一 三圖
衡量 第十二
樂器 第十三
氣金 第十四
耕農 第十五
文易 第十六
醫療 第十七
物產 第十八 三圖
數量 第十九
第廿

土俗風習　　第廿壹

巻之八　　第廿二

言辭　　時令

天文　　地理　諸國地名　本國通称　　居室

人倫　　身體　　衣服織紅

動物　　器財

飲食　　言辭　二門

各門譯語并名物ノ解其下釋セリ

巻之九

癸亥此年二月ヨリ會ヲ始テ拾三人ノ者ニテ

ツカ出ヅ七十里の乃中ヘ首途ー 舊都ー
ムスクツを經ヘ新都ヘトルクルカヘ到ヲル
乃中の記事ヨリ舊都留中ノ記ニ至ル享和
三年ニ

巻ニ十

國王ヘ目見ノ式ノ次第ヨリ都下巡覽ノ記
六月

巻ニ十一

都府滯留中の記ニ
北ヲヲテ
六月 帝王等四人の老母使節私
ノ件歸郷ヲ命ヲ上面ヲ添ヘル出ヲニテカナ

スタというふ港より大船を漕出の記

九図

巻之十二

六月十六日カナスタ出帆筭那馬尔加と詣 尼利亜ん船を泊めて加那里亜嶋へ船をまわせまり赤道より下の海上を経て南亜墨利加例伯西児の内エカテリナ湊へ着岸の法語及同所出帆して其大洲を漕廻を索迹して西海を向ひしを記

巻之十三

甲子文化元年四月下旬ニルケイサというふ

裸堂人

航をかけ出帆を告げてふたゝび赤道をこえ
西ニ距ること九十度へイツケ湾に歴まより北亜墨利
加洲を右ニみて〳〵亜細亜洲ある脊西亜領分
の盡境カシヨーツカといふ湊へ七月初旬着岸
の後数日逗留の間数日遠出の事ありて八月
五日出帆帰路より日本東西ニあたる大洋
を渡海〳〵薩摩海へ九月初旬帰着前七端
入津迄之記
五冊

巻之十四

長崎港入船上陸後の江戸着並ニ
文化二年乙丑三月

序奉行所市請取近く記
巻之十五
徒士席召前後の間雑変

総計拾五巻　巻之序例目録二巻
共十六巻

従寛政五年癸丑到文化三年丙寅拾三年と
なる
環海異聞序例附言并総目録終

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM